科研費基盤研究（S）「仏教学新知識基盤の構築―次世代人文学の先進的モデルの提示」研究会
「デジタル時代の仏教学のあり方」2019年2月9-10日　東京大学本郷キャンパス法文1号館219教室

日本語史における『一切経音義』の活用

（広島大学）　佐々木　勇

［要旨］

日本において、玄應『一切經音義』は、さかんに利用された。

しかし、慧琳『一切經音義』が利用された跡は、見出せない。

日本に大量に伝存する古写本・古刊本の情報を世界に発信することは、日本在住の研究者にとって重要な仕事である。

慧琳音義の本文は、SAT大蔵経DBで公開されている。また、玄応『一切経音義』も、李乃琦「一切経音義全文データベース」の公開によって、日本古写本を含めた諸本対照可能な本文が検索・閲覧可能となる。

影印・画像の公開が進んでいることも、デジタル時代の仏教学および関連諸学にとって喜ばしい。

原本画像の公開に際しては、紙背の注記も、表の本文との対応がわかるように表示して欲しい。また、原本に加点された訓点（角筆点を含む）が読み取り可能な精度の画像公開が望まれる。

［構成］

○、現存する宋代以前の『一切経音義』諸本
一、玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』との関係
　0．かつての一般的認識　　1．先行研究　　2．収載経の比較
　3．音義本文の比較
　　A．玄応音義収載経を慧琳音義で慧琳撰とする音義本文の比較
　　B．玄応音義収載経を慧琳音義で玄応撰とする音義本文の比較
二、玄応『一切経音義』諸本における日本古写本の位置
三、玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』に依る音韻研究
　1．玄応『一切経音義』に依る音韻研究
　2．慧琳『一切経音義』に依る音韻研究
　3．玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』に依る今後の音韻研究
四、日本語史における玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』
　1．日本語史における玄応『一切経音義』
　　A．玄応『一切経音義』と日本の古字書・音義
　　①『新撰字鏡』と玄応音義　②図書寮本『類聚名義抄』と玄応音義　③日本撰述音義と玄応音義
　　B．玄応『一切経音義』と日本の訓点資料
　2．日本語史における慧琳『一切経音義』
五、結び　―デジタル時代の仏教学への期待―
　1．検索可能な本文のデジタル化
　2．原本画像のデジタル化
　　A．大正蔵校本のデジタル化　　B．大正蔵未収仏典の古写本・古版本のデジタル化
　　C．原本画像のデジタル化に際して望むこと
　　①紙背情報のデジタル化　　②訓点可読なデジタル化
　3．まとめ

〇、現存する宋代以前の『一切経音義』諸本

①玄應『一切經音義』（大唐眾經音義）　全二十五巻　661 年頃
②慧琳『一切經音義』（新收一切藏經音義）　全一百巻　783 ― 807 年
③可洪『新集藏經音義隨函錄』（藏經音義隨函錄）　全三十冊　931 ― 940 年
④行瑫『内典隨函音疏』　全五百許巻（不全）　10 世紀前半
⑤希麟『續一切經音義』　全十巻（大正蔵 No.2129）　987 年頃
⑥處觀『紹興重雕大藏音』　全三巻　1093 年

	東禅寺版	開元寺版	思渓版	高麗蔵	大正蔵	中華蔵
①玄應	階(458)―弁(461)	（同左）	（同左）	No.1063	―	No.1163 No.1164
②慧琳	―	―	―	No.1498	No.2128	No.1165
③可洪	―	―	―	No.1257	―	No.1170
④行瑫	―	―	―	―	―	―
⑤希麟	―	―	―	No.1497	No.2129	No.1166
⑥處觀	―	―	英（480）	―	―	No.1169

注　成立年は、高田時雄「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」（『中国語史の史料と方法』〈1994 年、京都大学人文科学研究所〉所収）に依る。

④行瑫『内典隨函音疏』については、牧田諦亮「行瑫の『内典隨函音疏』について」（『五代宗教史研究』1971 年、平楽寺書店）、梶浦晋「西大寺（南宋磧砂版）」（『奈良県大般若経調査報告書　本文篇』〈1992 年、奈良県教育委員会〉所収、『奈良県大般若經調査報告書　一　資料篇 1』〈同上〉）、高田時雄「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」、同「新出の行瑫『内典隨函音疏』に關する小注」（『敦煌寫本研究年報』第 6 號、2012 年 3 月）、参照。梶浦の報告書には、西大寺藏磧砂版『大般若波羅蜜多経』巻第一～四・八～十一に、巻末音釈として、『内典隨函音疏』が引用されていることが指摘されている。磧砂版として一般に活用されている『宋版磧砂大蔵経』（1987 年、新文豊出版公司）や『磧砂大蔵經』（2005 年、綫装書局）所収本には、『内典隨函音疏』とは別の音釈が見られる。西大寺藏磧砂版『大般若波羅蜜多経』以外でも、書陵部蔵本（函架番号:510･1）・海の見える杜美術館蔵本は、『内典隨函音疏』を巻末音釈とする。書陵部蔵本は、「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧 ―書誌書影・全文影像データベース― 」にて、全頁写真が公開されている。

『大正新修大蔵経』の底本は高麗蔵であり、『頻伽精舎校刊大藏經』（1913 年、上海）と対校する。

『中華大蔵経』の底本は、①玄応 No.1163 は高麗蔵と金藏廣勝寺本、No.1164 は明永樂南藏本、②③⑤は高麗蔵、⑥は思渓版である。

右のとおり、玄応『一切経音義』は、開元釈教録・貞元新定釈教目録に入り、日本・敦煌等にも、多くの写本が存する。宋版・高麗版としても流布した。

一方、慧琳『一切経音義』は、録外であって、高麗版としてのみ伝わった。日本・敦煌等の写本は、見つかっていない[1]。

一、玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』との関係

0．かつての一般的認識

小林芳規「宮内庁書陵部蔵・広島大学藏・天理図書館蔵　一切經音義解題」（『古辞書音義集成　第九巻』一九八一年、汲古書院）は、玄応『一切経音義』が、日本において奈良時代以来しばしば書写され、

黄檗版・天海版・縮刷蔵経にも収められて伝えられたことを述べた後、次のように記す。

加えて、元和二年（八〇七）に成った慧琳一切経音義一百巻に、玄應音義がそのまま組込まれ、高麗版やこれに基く大正新脩大蔵経に収録されて、後世に傳わったことによる所もその一因であろう。慧琳は唐都長安の西明寺の僧であり、その一切経音義は、玄應一切経音義二十五巻に、慧苑の新華厳経音義二巻、基師の妙法蓮華經音義などを包容し、更に多くの佛典音義を加えて成ったものである。（傍線、佐々木）

慧琳『一切経音義』百巻は、玄應『一切経音義』二十五巻を完全に取り込んだ、と一九八一年当時まで一般には認識されていたらしい。大正蔵が慧琳音義を採録し、玄応音義を省略したのも、恐らくそのためではなかろうか。

1．先行研究

しかし、慧琳音義に、玄応音義は「そのまま組込まれ」てはいない。

これは、玄応音義と慧琳音義「玄応撰」部分とを比較してみれば、すぐに気づかれる。[2]

右の解題と同じ年に、上田正「玄応音義諸本論考」（「東洋学報」63(1・2)、一九八一年十二月）が出た。上田は、「慧琳音義所収の玄応音義には慧琳による増訂が多い」として、慧琳音義引用玄応音義の446経を、「(1)不改116 26%」～「(8)琳撰15 3%」に分けた。すなわち、慧琳音義引用玄応音義の74%は、なんらかの改変が加えられている。また、「玄応音義に有りて慧琳音義に無き経が二五種ある」（8頁）、「反切や訓釈が玄応のものか慧琳のものかの判定は、経別では不可能で、一語一句に至る校合に依るほかない」（12頁）、「慧琳音義所収の反切の改変は、慧琳の音系の問題である」（23頁）など、重要な指摘をしている。

2．収載経の比較

収載する経名について、慧琳音義引用の玄応の記述が玄応音義と異なることを、具体的に確認する。ただし、玄応音義は、目録と本文とで経名が異なる。[3] ここでは、玄應音義巻第五の本文に採録された経を、慧琳音義がいかに取り込んだかを見る。

玄応音義巻第五本文には、八十五の経名が見られる。その1～30番までの経名と慧琳音義の所在巻数および撰者名を示せば、左のとおりである。なお、玄應音義・慧琳音義とも、追認が容易であることを優先し、本稿では、特に断らない限り、高麗再雕版の本文を引く（なお、本項については、高麗初雕版・金版の玄応音義も全同）。

玄応連番	本文経名	慧琳巻数	慧琳が記す撰者名	貞元録 No.
1	海龍王經	巻第38	玄應	451
2	央掘魔羅經	44	玄應	481
3	觀察諸法行經	44	慧琳	477
4	七佛神呪經	42	玄應	531
5	菩薩本行經	44	玄應	475
6	稱揚諸佛功德經	34	玄應	444
7	力莊嚴三昧經	43	玄應	471
8	須真天子經	34	玄應	445
9	般舟三昧經	19	慧琳新補	83
10	等目菩薩所問經	24	玄應	129
11	超日明三昧經	34	玄應	460
12	月上女經	44	玄應	487

13	中陰經	44	玄應	484
14	須彌藏經	19	慧琳	74
15	佛華嚴入如來不思議境界經	24	慧琳	110
16	諸佛要集經	32	玄應	457
17	文殊師利佛土嚴淨經	16	玄應	42
18	濡首菩薩無上清淨分衛經	10	慧琳撰	14
19	大乘同性經	30	玄應	183
20	阿閦佛國經	16	玄應	37
21	蓮華面經	（ナシ）	／	492
22	迦葉經	（ナシ）	／	1255
23	孔雀王神呪經	37	玄應	350
24	發覺淨心經	16	慧琳	48
25	無上依經	33	慧琳	266
26	移識經	（ナシ）	／	1262
27	未曾有經	33	慧琳	267
28	不思議功德經	43	玄應	467
29	大吉義呪經	42	玄應	532
30	菩薩夢經	（ナシ）	／	1245

（以下略）

右のとおり、連番21・22・26・30の各経は、玄応音義に存しながら、慧琳音義には採られていない。省略した31番以降でも、32密迹金剛力士経・77虚空藏菩薩所問持幾福経は、慧琳音義に見出せない。そして、玄応音義巻第五では注を有する81天王太子辟羅経を、慧琳音義は巻第四十五に経名のみ記し、「無字音訓」とする。[4]

また、慧琳音義採録経が玄応音義に入っていても、「慧琳」「慧琳撰」となっている経が少なくない。玄応音義巻第五の八十五経中、二十四の経は、慧琳音義では慧琳の撰とされている。

3．音義本文の比較

A．玄応音義収載経を慧琳音義で慧琳撰とする音義本文の比較

玄応音義に収載されているにもかかわらず、慧琳音義で「慧琳」撰とされた経は、玄応と異なる注を慧琳が付したのであろうか。

左に、その実態を見る。（掲出字と注文との間に空白を置き、注文も同じ大きさで記す。以下同じ。）

玄応音義　巻第五3『觀察諸法行經』	慧琳音義『觀察諸法行經』
巻第一　撞弩　徒江反廣雅云撞剌也説文撞戟擣也	捨捉　烏革反包咸注論語云横木以縛捉是也説文從手戹聲正體作捉經作扼俗字也
第三巻　不槩　古文扢同公礙公内二反扢量也廣雅扢摩也蒼頡篇云平斗斛曰概　（以下略）	
玄応音義　巻第五9『般舟三昧經』	慧琳音義『般舟三昧經』
（ナシ）	上巻　慧琳新補 可賈　莫候反毛詩傳云賈易也韻英云貨易也説文易

般舟三昧經中卷　輕傷　又作敭今作易同以豉反蒼頡篇傷慢也平傷也

鶡鴨　胡葛反似雉鬬死不却故武人戴鶡冠以象之也出煇諸之山以其尾垂頭亦出上黨下古文鶴同烏甲反煇音魂

（以下、三項目略）

右のとおり、慧琳音義の掲出字と注文は、玄応音義を参考にしているものの、掲出字に追加・削除が見られ、注文も変更されている。(5)

B．玄応音義収載経を慧琳音義で玄応撰とする音義本文の比較

次に、慧琳音義に玄応撰として収載される経の例を見る。

玄応音義巻第一は、『大方廣佛花嚴經』（旧訳・六十華厳）から始まる。慧琳音義は、これを「前譯六十巻　玄應撰音」として、巻第二十の後半に入れる。この両者を比較する。

玄応音義『大方廣佛花嚴經』	慧琳音義『大方廣佛花嚴經』
a	
摩竭提　或云摩竭陀亦言默偈陀又作摩伽陀皆梵音訛轉也正言摩揭陀此譯云善勝國或云无惱害國一説云摩伽星名此言不惡主十二月也陀者處也名爲不惡處國亦名星處國也揭音渠謁反	摩竭提　或云摩竭陀亦言默偈陀又作摩伽陀皆梵音訛轉也正言摩揭陀此譯云善勝國或云無惱害國一説云摩伽星名此言不惡主十二日陀者處也名爲不惡處國亦名星處國也揭音渠謁反
b	
華鬘　梵言俱蘇摩此譯云華摩羅此譯云鬘音蠻案西國結鬘師多用蘇摩那華行列結之以爲條貫无問男女貴賤皆此莊嚴或首或身以爲飾好則諸經中有華鬘市天鬘寶鬘等同其事也字體從髟音所銜反鼻聲鼻音彌然反經文作髶非體也	華鬘　梵言　摩羅此譯云鬘音　案西國結鬘師多用蘇摩那華行列結之以爲條貫無問男女貴賤皆此莊嚴或首或身以爲飾好則諸經中有華鬘市天鬘寶鬘等同其事也字體從髟音所銜反邊(1)聲鼻音彌然反經文作髶非體也
c	
踰摩　字書作逾同庾俱反字林踰越也廣雅踰度也言摩尼者訛也正言末尼謂珠之總名也	踰摩　字書作逾同庾俱反字林踰越也廣雅度也言摩尼者訛也正言末尼謂珠之總名者也

慧琳音義が「玄應撰音」とする如く、大部分は、玄応音義に一致する。

しかし、異なる箇所も存する。

その異同の原因を探るには、慧琳音義は高麗再雕版しか伝わらないため、玄応音義諸本を見るしかない。以下、日本古写本および宋版本文と対照する。

a「十二月也」は、中尊寺本・大治本、宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版「十二月」、石山寺本「十二月也［ミセケチ］」、金版「十二月也」である。よって、玄応音義の「十二月」が本来の本文であった、と考えられる。

b華鬘の注は、右の対照表のみ見れば、慧琳音義が「俱蘇摩此譯云華」を落としているかのように見える。しかし、中尊寺本・大治本・石山寺本のいずれにもこれは無い。（金版・宋版東禅寺版・開元寺

財也從貝乖聲乖古文夘字經作貟非也

（以下、三項目略）

般舟三昧經中卷　輕傷　又作敭今作易同以豉反蒼頡篇云傷慢也謂平傷也

鶡鴨　胡葛反似雉鬬死乃止故武士戴冠以象之也山海經云煇諸之山多鶡鷄以其尾垂頭也亦出上黨郡下音押水鳥也

（以下、三項目略。注文は玄応と異なる。）

版・思渓版は、これを記す。）「華鬘」の「華」への注「梵言俱蘇摩此譯云華」が無い本文が古形であれば、慧琳音義は高麗再雕版よりも古い玄応音義を引用したことになる。

次の異同、玄応「鬘音蠻」は、中尊寺本・大治本・石山寺本、金版・宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版にも存する。慧琳音義の誤脱であろう。

三点目「鼻」は、中尊寺本・大治本・石山寺本・金版・宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版は玄応と同じ「鼻」、である。よって、「鼻」が本来の本文であったと考えられる。[6] なお、右の(1)大正蔵 T2128_.54.0431a11は、高麗再雕版本文「聲」を、無注で「音」に変更している。[7]

c「踰度也」「總名者也」の「踰」「者」は、中尊寺本・大治本・石山寺本・宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版にも有る。金版は、玄応音義高麗再雕版と同文である。「踰」字が存するのが古い本文であろう。「者」については、有無の新古が不明である。

右のごとき実態である。

このわずかな比較からも、両者の相違が誤刻の範囲を越えていることが知られる。これらの異同の原因は、両者の原本に遡る。慧琳音義（高麗再雕版）が依拠した玄応音義は、高麗再雕版の玄応音義とは異なる本文である。

玄応音義本文再建には、日本・敦煌等に遺存する古写本および金版・初雕高麗版[8]・宋版の東禅寺版・開元寺版・思渓版本文を活用すべきである。李乃琦「一切経音義全文データベース」の公開が待たれる。

二、玄応『一切経音義』諸本における日本古写本の位置

○佐々木 勇「玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について」（「訓点語と訓点資料」133、二〇一四年九月）。

玄應『一切経音義』巻第五は、宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版に大きな欠落がある。日本古写本にこの欠落は無く、その点で、高麗版に近い。

○ 佐々木 勇「広島大学新収石山寺本玄應『一切経音義』巻第十承安五年写本」（「国文学攷」230、二〇一六年六月）。

玄應『一切経音義』巻第十の諸本は、目録の経名からは、次のように分かれる。

A「唯識論」有り―宋版（東禅寺版・開元寺版・思渓版）・中尊寺本

B「唯識論」無し―高麗初雕版・高麗再雕版・金版・石山寺本・大治本・七寺本・金剛寺本

しかし、巻第十の本文経名からは、次のように分けられる。

A「唯識論」有り

i「三具足論」有り―宋版（東禅寺版・開元寺版・思渓版）・大治本・七寺本・金剛寺本

ii「三具足論」無し―中尊寺本・石山寺本[後補]

B「唯識論」無し―高麗初雕版・高麗再雕版・金蔵

石山寺本巻第十の本文は、高麗版や宋版と異なる点が比較的多く、他の日本古写本に近い。比較した諸本の中では、中尊寺本に最も近い。

○李 乃琦『一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究』（博士論文〈北海道大学〉、二〇一八年三月）。

玄応音義は、三つの系統に分けられる。

高麗本系統【高麗本、七寺本A（巻第一～巻第十、巻第十三、巻第十四）】

大治本系統【大治本、金剛寺本、七寺本B（巻第十二、巻第十五（東大本）、巻第十六～巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五）】

石山寺本系統【石山寺旧蔵本（広大本、京大本、天理本巻第九）、天理本巻第十八、西方寺本】

○落合俊典「敦煌の佛典と奈良平安写経 ―分類學的考察―」（高田時雄編『漢字文化三千年』〈二〇〇九年、臨川書店〉

所収）。

聖語蔵は、冒頭で述べたように奈良写経は天平十二年御願経（750巻）と神護景雲二年御願経（742巻）を合わせた1,492巻であるが、この他の機関、個人蔵を集めても二千巻には及ばないであろう。だが、我々は奈良写経の転写本である平安写経や鎌倉写経を参看することが可能である。

（中略）

隋唐佛教のコア部分であった一切経が同心圓的に拡大し、日本でも書写されていった。現在、奈良写経二千巻弱以外に三萬巻を越す平安鎌倉時代の経巻が存している。刊本一切経の精密性や厳格性に圧倒されて本来の価値を見落としてきたことは反省すべきであろう。

○中村一紀「書陵部蔵福州版一切経の本文欠落巻について」（「汲古」第74号、二〇一八年十二月）。

「書陵部本一切経には大幅な本文欠落巻がある」「これらは過失によるものではなく、作為的であり故意に行われた可能性は高い。」

金文京「編集後記」（右中村論文に対する「汲古」第74号編集後記の文章）

中村論文は、書陵部蔵福州版一切経について、その一部の巻の巻末部分が作為的に十紙ほど削除され、それに伴い末尾の丁付も意図的に改められている事実を、実例をあげて述べる。その理由について中村氏は、あまり厚くなると箱に収まらなくなる可能性を指摘するにとどめ、それ以上の推測は慎重に避けられた。しかしありていに言えば、これはまぎれもないインチキである。（以下略）

三、玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』に依る音韻研究

1．玄応『一切経音義』に依る音韻研究

周法高「從『玄應音義』考察唐初的語音」（「學原」2-3、一九四八年）以来の中国における研究は、後世のテキストに依拠しており、[9] 玄応が生きた時代の音韻研究としては、問題が残る。

『玄応音義』の音韻研究は、上田正『玄応反切総覧』（一九八六年）に依るべきである。

上田が校訂した反切によって、森 博達「《玄應音義》における三等韻の分合について」（「均社論叢」5-2, 一九七八年十月。後、『古代の音韻と日本書紀の成立』〈一九九一年、三省堂〉に所収）が書かれた。この論文で、「玄応の音系では、舌歯音下において之韻→脂韻、尤韻→幽韻という二組の合流が起っている」ことが明らかになった。

2．慧琳『一切経音義』に依る音韻研究

河野（一九五五）は、慧琳音義の反切上字は、反切帰字の/IMVF/・/IMV/と一致する割合が八割に近いことを指摘した。[10] 平山（一九六二）は、この慧琳の反切を、「異調同音上字式反切」と呼んだ。[11] 吉池（一九八八）は、この慧琳型反切は、慧琳音義が引用する『考聲切韻』（705 ～ 709 年成）にすでに見られ、慧琳音義が『考聲切韻』の「反切用字法」と「反切それ自体」を継承した可能性とを述べた。[12] その反切によって記された音には、「切韻以来の伝統的規範的な反切と口頭音の秦音」とがある。[13]

ただし、慧琳が独自に付した音注を抽出する作業（玄応音義等から引用した音注を除外する作業）を経なければ、慧琳の音韻体系は正確にはわからない。[14]

しかし、慧琳音義は高麗版しかなく、玄応音義の校本も未公開である。

3．玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』に依る今後の音韻研究

上田正「玄応音義諸本論考」（16頁）に、日本古写本と敦煌本の反切に「他本より新しい変更と思われるものは認められない。これらは玄応の原形と考えられる。」との指摘が有る。

また、「麗蔵本も反切の変改は少い。」（17頁）として、麗蔵本玄応音義の増訂例、左二例を挙げる。

巻第十六「鼻奈耶律」巻第四　雌〈此之反〉

巻第二十四「阿毘達磨倶舎論」巻第一　強〈巨兩反〉

右の反切は、日本古写本（中尊寺本・大治本）及び宋版東禅寺版・開元寺版・思渓版には存しない。すなわち、高麗再彫版のみでは、玄応当時の本文に依拠した研究はできない。

音韻研究では、上田正『玄応反切総覧』（一九八六年）、同『慧琳反切総覧』（一九八七年、汲古書院）を、基礎資料とすべきである。

ただし、上田が見ることができた日本古写本―大治本・石山寺本（巻第二～五・九・二五）・正倉院蔵本（巻第四・二〇・二一）・天理図書館蔵本（巻第一八）―以外の日本古写本と、初雕高麗版・金版・宋版（東禅寺版・開元寺版・思渓版）における本文情報を補うべきである。

四、日本語史における玄応『一切経音義』と慧琳『一切経音義』

1．日本語史における玄応『一切経音義』

A．玄応『一切経音義』と日本の古字書・音義

①『新撰字鏡』と玄応音義

『新撰字鏡』（900 年頃成）は、玄応『一切経音義』を部首分類し、『切韻』・『玉篇』及び私記類の内容を増補したものである。

○池田　証寿「玄応音義と新撰字鏡」（「国語学」130、一九八二年九月）

要旨：『新撰字鏡』は、玄応音義の巻14～16、巻19・20を中心に採録している。採録項目は、17,000項目程度であったと推測される。

②図書寮本『類聚名義抄』と玄応音義

○池田　証寿「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」（「国語国文研究」88、一九九一年三月）。

要旨：図書寮本類聚名義抄撰者（十二世紀の人）は、玄応音義の内容をすべて採用する方針であった。その出典の採用の順位は慈恩大師、弘法大師についで第三位であった。

○李　乃琦「図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切経音義』の依拠テキスト ―『一切経音義』巻第四を中心に―」（「訓点語と訓点資料」137、二〇一六年九月）。

要旨：図書寮本『類聚名義抄』の編者が引用した玄応『一切経音義』は、大治本系統である。

③日本撰述音義と玄応音義

大治本『新華厳経音義』（八世紀成立）・信行『大般若経音義』（八世紀末成立）の最大典拠は、玄応音義である（池田　証寿「上代仏典音義と玄応一切経音義　―大治本新華厳経音義と信行大般若経音義の場合」（「国語国文研究」64、一九八〇年九月）。

玄応音義は、『妙法蓮華経釈文』（平安中期仲算撰）や『倶舎論音義』（鎌倉時代初期成）などの出典でもある。[15]

B．玄応『一切経音義』と日本の訓点資料

「我が漢音（中略）の典拠は、まず、玉篇、切韻、玄応音義の三つである」（高松政雄『日本漢字音の研究』〈一九八二年、風間書房〉二七頁）。「奈良時代以後、我が国で利用された反切音注の典拠には多数のものが数えられるが、主要なものとしては、どれが中心と言う事は出来ないが、「玉篇」「切韻」「玄応一切経音義」の三書がまず上げられる」（沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）、六一頁）。

その他、白藤禮幸「上代文献に見える字音注について（一）」・同（二）（「茨城大学人文学部紀要 文

学科論集」２・３、一九六八年十二月・一九六九年十二月）を参照願いたい。

２．日本語史における慧琳『一切経音義』

「筆者は「慧琳音義」は我が国漢音学習には全く利用されなかったと考える。慧琳音義の反映した音体系が我が漢音の基層と一致するにすぎないと考えるのである。」（沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）五八頁）。

はじめに述べたとおり、古代の日本に『慧琳音義』が伝わった形跡は、無い。

したがって、『慧琳音義』は、日本語史に直接の影響を与えていない。

五、結び　―デジタル時代の仏教学への期待―

日本に大量に伝存する古写本・古刊本の情報を世界に発信することは、日本在住の研究者にとって重要な仕事である。

１．検索可能な本文のデジタル化

慧琳音義の本文は、SAT 大蔵経 DB で公開されている。また、玄応『一切経音義』も、李乃琦「一切経音義全文データベース」の公開によって、日本古写本を含めた諸本対照可能な本文が検索・閲覧可能となる。

これら本文のすべての文字が、検索可能となることが期待される。

２．原本画像のデジタル化

原本の影印・画像公開が進んでいることも、デジタル時代の仏教学および関連諸学にとって喜ばしい。

A．大正蔵校本のデジタル化

大正蔵の校異「略符」初めに、「㊂　宋元明三本」「㊋　宋本」「㊍　元本」「㊐　明本」と記される。この、宋本は思渓版、元本は普寧寺版、明本は嘉興蔵である。[16]

宋版の中、思渓版は、日本の古写経・古版経にもっとも大きな影響を与えた。[17]

SAT 大蔵経 DB に、思渓版と普寧寺版の画像がリンクされるのが理想である。

B．大正蔵未収仏典の古写本・古版本のデジタル化

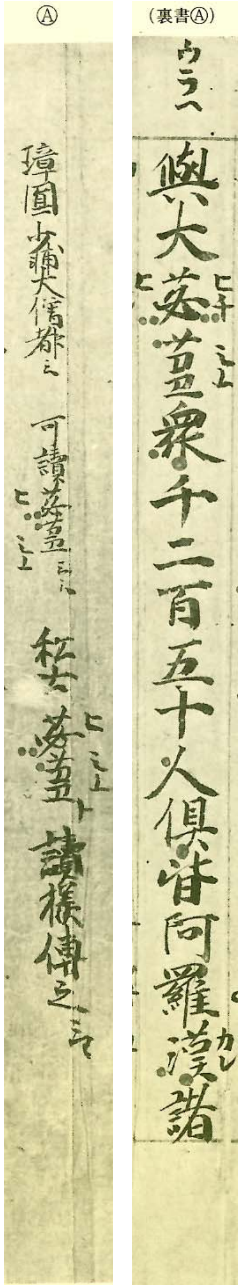
玄応音義・高麗国新雕大蔵校正別録・新譯大方廣佛華嚴經音義・紹興重雕大藏音・新集藏經音義隨函録などなど、多くの仏典本文のデジタル化が俟たれる。

C．原本画像のデジタル化に際して望むこと

①紙背情報のデジタル化

原本画像の公開に際しては、紙背の注記も、表本文との対応がわかるように表示して欲しい。[18]

0）東京大学文学部国語研究室蔵『大般若波羅蜜多経』巻第一（特 22D40）建長六年延玄校了本（大東急記念文庫蔵 1002 番『大般若波羅蜜多経』全五八三帖の僚巻）



（『東京大学国語研究室資料叢書15　古訓点資料集　一』〈一九八六年、汲古書院〉に依る）

1）早稲田大学蔵『大般若波羅蜜多経』巻第七十（ハ 05 01041）建長三年延玄校了本（同じく、大東急記念文庫蔵 1002 番『大般若波羅蜜多経』全五八三帖の僚巻）

2）国会図書館蔵『大毘盧遮那成佛神變加持經』巻 1,3-7（奈良写経、WA2-15）

②訓点可読なデジタル化

原本に加点された、角筆点を含む訓点が読み取り可能な精度の画像公開が望ましい。

1）早稲田大学蔵『大般若波羅蜜多経』巻第五四八（ハ 05 00702）「書写年不明」　朱点

2）国会図書館蔵『大毘盧遮那成佛神變加持經』巻 1,3-7（奈良写経）WA2-15

築島裕『平安時代訓点本論考　研究篇』（一九九六年、汲古書院）九八六頁に、左の訓点があることが記される。[19]

A　平安時代中期と覚しき白点（特殊点乙類）

B　平安時代中期天暦頃と覚しき朱点（東大寺点）

C　治安二年（一〇二二）仁和寺平救の資の加点せる白点（円堂点）

D　嘉承三年（一一〇八）仁和寺聖恵の加点せる朱点（円堂点）

E　保安四年（一一二三）俊譽の資の加点せる朱点（円堂点）

F　江戸時代初期の朱点

例）巻第七25コマ目左3行目「浴　A[白]せしむ？　B[朱]ユアムス　C[白]ユアムス　DE？[朱]ならむ？」

この本には、他に、平安中期の角筆点が存するという（小林芳規『角筆文献目録（一九九九年版）』70 頁）。

3）国会図書館蔵『附音増廣古注蒙求』（室町後期写本）WA16-32

中巻 7 コマ目　簡　[角筆]カン 267　　中巻11コマ目　公　[角筆]コウ 301

（佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　資料篇』（二〇〇九年、汲古書院）、参照）

4）角筆点

小林 芳規「角筆文献研究の課題」（「国語学」128号、一九八二年三月）

3．まとめ

「デジタル時代の仏教学」が進む道に、以下の二点を加えて頂きたい。

A．大正蔵未収経典本文のデジタル化

SAT は、今後も、仏教学の中心に有り続けるであろう。玄応『一切経音義』をはじめ、未収録の経典本文の検索可能なデジタル化を期待したい。

B．デジタル化本文と高精細画像とのリンク

右のデジタル化本文とリンクする原本画像は、紙背の注記も、表の本文との対応がわかるように表示して欲しい。

また、原本に加点された訓点（角筆点を含む）可読な精度の画像公開が望まれる。

注

（1）玄応『一切経音義』を所蔵している、あるいはかつて所蔵していた古寺の聖教目録に依ると、石山寺・高山寺・東寺・醍醐寺・七寺・興聖寺・金剛寺・薬師寺に、慧琳『一切経音義』の古写本は現存しない。また、高山寺古経目録にも、慧琳『一切経音義』の名は見られない。高田時雄「可洪隨函録と行瑫隨函音疏」（『中国語史の史料と方法』〈一九九四年、京都大学人文科学研究所〉所収）113頁に依ると、慧琳『一切経音義』は、中国においても

九世紀末に既に稀覯書であり、敦煌遺書のうちにも存しない。

(2) 矢放昭文「慧琳音義所收玄應音義の一側面」(「均社論叢」6-1、一九七九年五月)、参照。

(3) 佐々木 勇「玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について」(「訓点語と訓点資料」133、二〇一四年九月)、同「広島大学新収石山寺本玄應『一切経音義』巻第十承安五年写本」(「国文学攷」230、二〇一六年六月)、参照。

(4) 本例を含め、類例四例が上田(一九八一)10頁で指摘されている。

(5) 玄応音義挙例最後の注文「煇音魂」は、日本古写本の中尊寺本・石山寺本には見られない。

(6) この注は、「鬘」の「字體」は「音所銜反」の「彡」に「從」り、「鼻」を「聲」とする。「鼻」の「音」は「彌然反」である、の意であろうか。

(7) 大正蔵が基とした『大日本校訂大藏經』音義部爲八および白蓮社版も「邊聲」である。ただし、中尊寺本は「鼻音」とする。

(8) 守其等撰『高麗国新雕大蔵校正別録』に玄応音義に関する校正は見出せない。しかし、巻第二の第七紙二行目末「音是臾反」が初雕本には無いなど、高麗版の初雕本と再雕本とにも、異同が有る。

(9) この点、李乃琦「玄応音義に関する研究史と課題」(「北海道大学文学研究科 研究論集」16、二〇一六年十二月)が要約・整理している。

(10) 河野六郎「慧琳眾經音義の反切の特色」(「中國文化研究會會報」5-1、一九五五年十一月)。

(11) 平山久雄「切韻系韻書の例外的反切の理解について」(「日本中国学会報」14、一九六二年)。

(12) 吉池孝一「「倭名類聚抄」所引の「考聲切韻」逸文の反切と「慧琳音義」の反切」(「汲古」13、一九八八年六月)

(13) 上田正「慧琳音論考」(「日本中国学会報」35、一九八三年)。

(14) 矢放昭文「慧琳音義卷第二十七の反切について」(「均社論叢」5-2, 一九七八年十月)は、慧琳音義卷第二十七の反切には「切韻系韻書の性格を有したものが多い」、と言う。同「慧琳音義所收玄応音義の一側面」(「均社論叢」8、一九七九年五月)でも、慧琳音義卷第三十一『大灌頂経』では、慧琳音義中に玄応音義と異なる音系を示す反切は少ないことを述べる。同「慧琳音義反切の等韻学的性格」(「均社論叢」10、一九八一年十月)では、「慧琳型の反切が韻図の四つの等位にもとづいて作成された可能性はきわめて大きく、ほぼ否定出来ない」と記す。

(15) 吉田金彦「妙法蓮華経釈文解題」(『古辞書音義集成 妙法蓮華経釈文』〈一九七九年、汲古書院〉)、西崎 亨「倶舎論音義の引用書について(一)玄應撰『一切経音義』・『廣韻』の場合」(「武庫川国文」70、二〇〇七年十一月)、小林芳規「一切経音義解題」(『古辞書音義集成 一切経音義(下)』〈一九八一年、汲古書院〉)等、参照。

(16) 船山徹「漢語仏典――その初期の成立状況をめぐって」(京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『京大人文研漢籍セミナー1 漢籍はおもしろい』(二〇〇八年、研文出版)所収。

(17) 佐々木 勇「尊氏願経と宋版一切経思渓版」(「MUSEUM」第659号、二〇一五年十二月)、同「足利尊氏発願一切経の底本」(「かがみ」第46号、二〇一六年三月)、同「春日版『五部大乗経』の底本とされた宋版一切経(二)――本文の比較による検討――」(「広島大学大学院教育学研究科紀要」第二部第65号、二〇一六年十二月)、同「春日版「五部大乗経」本文と底本選択理由」(「日本古写経研究所研究紀要」第2号、二〇一七年三月)、同「和泉市池辺家蔵「相州新大仏一切経」の底本」(「広島大学大学院教育学研究科紀要」第二部第67号、二〇一八年十二月)など、参照。

(18) 佐々木 勇「今なぜ古文献の原本調査が必要か」(『日本語学会2016年度秋季大会予稿集』二〇一六年十月)、参照。

(19) 築島裕『平安時代訓点本論考 ヲコト点図・仮名字体表』(一九八六年、汲古書院)四七二・五〇六・五九八頁には、平安中期白点・治安二年(一〇二二)白点・平安中期朱点の仮名字体表とヲコト点図とが有る。